



株式投資を増やすべきか、減らすべきか

最近、改訂された米国ペンシルバニア大学のジェレミー・シーゲル教授著の「長期の株式 (Stocks for the Long Run)」は、1802～2002 年にわたる米国株式市場の統計データから、数多くの知見を引き出した名著である。その結論は、株式リスクプレミアムは過去の水準より低くなるが、長期投資には依然として株式が一番だというものである。

ついに NY ダウは一時 8,000 ドル、日経平均株価は 10,000 円を割り込むという世界同時株安のこの時期に、「何と楽観的な」と思われるかもしれないが、同序文において、「リスク (Against the Gods)」の著者であるピーター・バーンスタインも、株価のピークで買っても 20 年間保有すれば、やはり株式は債券よりもリターンが高いという分析結果を印象的に取り上げている。

日経平均株価のピークは 1989 年の 38,916 円であるが、もう既に 13 年近く経過した。この間の長期債投資からのリターンは非常に高いものとなっている。それなら、過去の法則に従って、そろそろ株式への配分比率を引き上げるべきだろうか？あるいは、リスクが高まっているので引き下げるべきだろうか？

《目次》

- ・年金運用：年金運用と貸株取引
- ・年金 ALM：米国の株式リスクプレミアム低下予測と年金 ALM 手法の発展
- ・年金運用：万人のための年金運用入門（17）
－株式インデックス・ファンド（1）